

# 花卉のグローバル・システムとその拡張

——米国における花卉流通の変容を中心として——

石 川 実 令

はじめに

- I 花卉の国際貿易の動向
  - II 米国における花卉の輸入増大と市場構造の変化
  - III 米国における花卉流通の変容
- むすびにかえて

## はじめに

本稿は、花卉のグローバル・システムの拡張とそれにとまなう米国の花卉流通の変容について、若干の整理・検討を行うものである<sup>1</sup>。元来、商品としての花卉は、市場に近い場所で栽培されることが一般的である。なぜなら、花卉は貯蔵性が乏しいという商品特性を有しており、鮮度が非常に重要視されるからである<sup>2</sup>。花卉の価値は収穫後1日ごとに25~50%減少するといわれており<sup>3</sup>、市場までの時間と距離の増大は、花卉の鮮度、延いては花卉の価値そのものに影響する。そのため、世界の花卉消費の大半はローカルな生産によって供給されていた<sup>4</sup>。

しかしながら、1970年代以降、花卉生産はグローバルに行われるようになった。今日では、市場への近接性を気にすることなく、世界中で、花卉が安く確実に育つ場所で栽培されるようになってきている<sup>5</sup>。この背景として考えられるのは、耕作技術や情報通信技術、輸送技術の発展、そして国際的な金融調整などである<sup>6</sup>。とりわけ輸送技術の発展は、花卉産地のグローバル化にとって重要な意味を持つ。一般に農産物の生産は自然条件の影響を受けやすく、花卉園芸においては気温、降水、日照、地形、土壌などがきわめて大切である<sup>7</sup>。これらの自然的条件が強く働くのは採種・球根生産であるが、本稿で考察対象とする切り花や鉢物の生産では自然的条件よりも、賃金、労働力、経営面積、

- 1 花卉類とは「観賞の対象となる栽培植物」のことを指しており、1・2年生草花、宿根草、花木類などを含むが、その出荷・利用形態により、切り花類、鉢物類、花壇用苗物類、花木・庭園樹、球根類、芝・地被類に区分される。本稿では切り花類に焦点をあてることとする。辻(2009)、165ページ。
- 2 辻(2001)、9ページ；内藤(2001)、1ページ。
- 3 Ziegler(2007)、p.68。
- 4 United States International Trade Commission(2003)、p.29。
- 5 Stewart(2008)、p.81。
- 6 Ziegler(2007)、pp.12-13。
- 7 太田(1976)、16、30-31ページ。

市場との距離などの経済的条件あるいは経営的条件に大きく左右される。そのため、自然的条件では適地であっても、その他の条件を欠くと、産地形成が困難となる。もちろん、主産地形成の要素は自然的条件や経済的条件などのさまざまな因子が相互に関連しあっており、決して単一の因子で産地の形成が行われるものではないが、輸送技術の発展は市場との距離を克服し、花卉生産のグローバル化をもたらしたと考えられる。

筆者はこれまで、グローバル・ロジスティクス・システムの生成、具体的にはインテグレーター (integrator) によるサービス高度化のプロセスについて研究してきた<sup>8</sup>。インテグレーターとは航空会社とエア・フレイト・フォワードナー (air freight forwarder) の機能を併せ持つ業態であり<sup>9</sup>、1970年代初頭の米国において誕生した。今日、代表的なインテグレーターとしては、ドイツポスト社傘下の DHL 社、フェデックス社、TNT 社、ユニテッド・パーセル・サービス社の4社が知られている。インテグレーターは世界各地に航空輸送ネットワークはもとより、陸上輸送ネットワークや情報ネットワークを張り巡らせ、さらに多様なロジスティクス・サービスを手がけるようになってい<sup>10</sup>る。従来、国境を隔てた地点間でモノを翌日に調達・配送することは不可能と考えられていたが、インテグレーターがこれを可能にした。

流通をシステムとしてみた場合、それは外部環境から影響されると同時に、環境に影響を及ぼす開かれたシステムである<sup>11</sup>。そして、通信、交通、技術など一般的な外部環境は流通の制約環境と呼ばれる。制約環境である交通インフラに変化が生じたとき、それは流通システムにどのような影響を及ぼすのだろうか。これが本稿の問題意識である。花卉は貯蔵性が乏しく、時間価値が高い。また、嗜好品的商品特性を有するために運賃負担力が高く、その結果として航空化率 (貿易額に占める航空輸送の割合) が非常に高い。さらには、花卉は航空輸送が発達する以前から商品として存在していた。以上のことから、花卉は輸送技術の発展にともなう流通の変容を分析するのに適していると考えられる。なお、輸送技術の発展の具体的な内容は本稿の対象外で、とりあえずは脚注8および10を参照されたい。

検討は以下の順序で行う。まず、花卉の国際貿易の動向を概観する。次いで、米国に

8 石川 (2007 a) ; 石川 (2007 b) ; 石川 (2006)。

9 エア・フレイト・フォワードナーは、自らは輸送手段 (ここでは航空機) を持たずに荷主企業に代わって輸送を手配するものを意味し、基本的に地上の集配と混載 (consolidation) を主要な業務としている。多数の荷主企業から集めた多数の小口貨物を一括して混載貨物に仕立て、航空会社に運送を委託するが、その際に、航空会社には低廉な高重量運賃を払い、荷主企業からは小口の運賃の支払いを受けることで、その差額を利益として収受する。

10 フェデックス社の生成過程については石川 (2003) を、同社の国際市場における輸送ネットワークの構築過程については石川 (2004) を、さらに同社の情報ネットワークについては石川 (2007 c) を参照されたい。また、インテグレーター4社によるロジスティクス・サービスの展開については、石川 (2005) を参照されたい。

11 矢作 (2001), 7-10 ページ。

における花卉の市場構造を考察し、輸入の増大とその特徴についてみる。そして最後に、米国における花卉流通の変容について論じるが、その際には、グローバルな商品連鎖 (global commodity chain; 以下では GCC) のアプローチを用いて花卉のグローバル・システムを分析しているジエグラー (C. Ziegler) を手がかりとする<sup>12</sup>。

## I 花卉の国際貿易の動向

まず、花卉の国際貿易の動向をみていこう。第1表は、1960年代初頭以降の花卉の輸出入上位5カ国の推移を示すものである。輸出入額の合計に注目すると、いずれも増大傾向にあるものの、とりわけ1970年代の成長率が著しいことが分かる。輸入額は1970年には1億5,700万ドルであったが、1980年にはその8.4倍の13億1,400万ドルに達している。また、輸出額についても、1970年の1億4,700万ドルから1980年の11億

第1表 花卉輸出入上位5カ国の推移 (1962, 1970, 1980, 1990, 2000, 2009年)

	輸入			輸出			輸入			輸出		
	国名	輸入額 (千ドル)	累計 シェア(%)	国名	輸出額 (千ドル)	累計 シェア(%)	国名	輸入額 (千ドル)	累計 シェア(%)	国名	輸出額 (千ドル)	累計 シェア(%)
1962年	旧西ドイツ	32,119	78.2	イタリア	23,330	45.9	旧西ドイツ	1,043,571	34.2	オランダ	1,950,364	68.8
	スウェーデン	5,631	91.9	オランダ	22,660	90.5	米国	407,936	47.6	コロンビア	228,887	76.9
	ベルギー／ルクセンブルグ	1,058	94.5	フランス	3,038	96.5	フランス	315,094	57.9	イタリア	142,722	81.9
	イタリア	688	96.2	デンマーク	1,360	99.2	英国	301,757	67.8	イスラエル	133,091	86.6
	ノルウェー	536	97.5	ベルギー／ルクセンブルグ	108	99.4	オランダ	165,520	73.2	スペイン	66,725	89.0
	合計額	41,089		合計額	50,780		合計額	3,051,050		合計額	2,835,965	
						1980年からの変化率:232.1%			1980年からの変化率:247.6%			
1970年	旧西ドイツ	110,685	70.5	オランダ	93,263	63.6	米国	770,804	19.2	オランダ	2,083,706	55.1
	スイス	12,340	78.4	イタリア	31,278	84.9	ドイツ	719,713	37.1	コロンビア	583,610	70.5
	スウェーデン	8,961	84.1	フランス	6,999	89.7	英国	542,297	50.6	エクアドル	155,552	74.6
	フランス	5,798	87.8	イスラエル	5,233	93.3	オランダ	424,589	61.2	イスラエル	139,872	78.3
	オーストリア	4,319	90.5	スペイン	2,156	94.8	フランス	382,263	70.7	ケニア	91,044	80.7
	合計額	157,081		合計額	146,652		合計額	4,016,589		合計額	3,784,062	
1962年からの変化率:382.3%			1962年からの変化率:288.8%			1990年からの変化率:131.6%			1990年からの変化率:133.4%			
1980年	旧西ドイツ	726,615	55.3	オランダ	756,011	66.0	ドイツ	1,042,551	15.4	オランダ	3,620,270	49.7
	米国	109,169	63.6	コロンビア	97,016	74.5	米国	960,405	29.6	コロンビア	1,049,225	64.1
	フランス	85,744	70.1	イタリア	86,886	82.1	英国	877,690	42.5	エクアドル	507,810	71.1
	スイス	70,102	75.4	イスラエル	84,344	89.5	オランダ	711,073	53.0	ケニア	421,484	76.9
	オランダ	57,774	79.8	タイ	20,755	91.3	フランス	544,031	61.0	ジンバブエ	334,117	81.5
	合計額	1,314,323		合計額	1,145,245		合計額	6,781,902		合計額	7,279,916	
1970年からの変化率:836.7%			1970年からの変化率:780.9%			2000年からの変化率:168.8%			2000年からの変化率:192.4%			

注：商品名は SITC.1-29271 (Cut flowers and buds for ornamental purposes)。  
出所：United Nations, Statistics Division, COMTRADE より作成。

4,500万ドルへと、7.8倍も増えている。1960年代、1980年代、1990年代、2000年代における変化率がそれぞれ1.3~3.8倍にとどまる点を考慮すると、花卉の国際貿易は1970年代に急増したといえる。

次いで、輸入上位国に注目すると、輸入は欧米諸国に集中していることが分かる。1960年代初頭から1970年代にかけての上位5カ国はすべて欧州諸国であり、それらが輸入額合計に占める比率は9割超に達する。とりわけドイツ(旧西ドイツ)のシェアが高く、1カ国で輸入額合計の7割程度を占めている。その後ドイツはシェアを減らし、代わって米国が輸入国として台頭している。2009年には全世界で67億8,200万ドルの花卉が輸入されており、ドイツ、米国、英国、オランダ、フランスの5カ国で輸入額の6割超を占めている。

花卉の輸入が先進国に集中していることは、花卉の嗜好品的な商品特性を反映している。花卉は青果物と同じ生鮮農産物であり、鮮度が重視されるが、これらは消費財としての性格が根本的に異なる<sup>13</sup>。すなわち、青果物が食用として消費され、なかでも野菜は生活必需品としての性格が強いのにに対して、花卉は観賞用として消費され、一部で必需品としての要素がかなり強いものがあるものの、一般的には嗜好品的な性格が強い。その結果として、商品特性にも差異がみられる。具体的には、野菜や果実は茎葉や根系、果実など植物体の一部が商品となり、味や栄養価、安全性が重視される。これに対して、花卉は植物体の全部あるいは大部分が商品となり、花色や花のボリューム、花の咲き方だけでなく、茎や葉の色や形状、草姿のバランスなど外観全体の美しさが重要であり、しかも一定期間の観賞に堪えうることが必要である。

第1表で輸出上位国に注目すると、輸入とは異なる特徴を指摘することができる。1960年代は欧米諸国からの輸出が中心であり、上位5カ国が輸出額合計に占める比率は9割を超えている。とりわけオランダのシェアは高く、今日に至るまで一貫して輸出額合計のほぼ半分を占めている。しかしながら、1970年代以降は輸出国に変化がみられる。すなわち、1970年代にはイスラエルとコロンビアが<sup>14</sup>、1980年代にはタイ、そして2000年代にはエクアドル、ケニア、ジンバブエが輸出国として台頭している。2009年には全世界で72億8,000万ドルの花卉が輸出されているが、オランダに続く輸出上位国はコロンビア、エクアドル、ケニア、ジンバブエといった発展途上国である。これら4カ国では生産した花卉を国内で消費することなく、そのほとんどを輸出していると考えられる<sup>15</sup>。

13 辻(2001), 9ページ; 内藤(2001), 1ページ。

14 United Nations, Statistics Division, COMTRADE.

15 中米では、コーヒー、バナナ、砂糖、綿花、牛肉などの伝統的輸産品に対して、花卉などの腐敗しやすい生鮮農産物は非伝統農業輸出品(nontraditional agricultural exports)と呼ばれる。ただし、非伝統産品の対象は必ずしも明確ではなく、また国によりまちまちである。黒崎(1999), 135ページ。

以上みてきたように、花卉の国際貿易は1970年代に著しく増大した。そして、花卉貿易は従来、先進国間で行われてきたが、1970年代以降は発展途上国からの輸出が大きなシェアを占めるようになってきている。これは、輸送技術の発展にともない時間と距離が克服されたことにより、市場への近接性にかかわらず、世界中で、花卉が安く確実に育つ場所で栽培されるようになったためだと考えられる。そうして、今日の花卉のグローバル・システムは、先進国と発展途上国が織りなす輸出入フローから成る動的で複雑なシステムとなっているのである。<sup>16</sup>

## II 米国における花卉の輸入増大と市場構造の変化

### 1 需給構造

米国は今日、ドイツに並ぶ花卉輸入国となっているが、1960年以前に米国へ輸入される花卉は実質的にはなかった。<sup>17</sup>しかしながら、1970年代以降、米国は花卉を輸入するようになった。以下では、米国における花卉の輸入動向と需給構造についてみていこ

第2表 米国における花卉の市場構造（1990～2005年）

	生産と貿易（百万ドル）				消費			
	国内生産	輸入	全供給	輸出	国内消費 (百万ドル)	1世帯当たり (ドル)	1人当たり (ドル)	輸入比率 (%)
1990年	467.7	326.2	794.0	29.5	764.4	8	3	42.7
1991年	471.6	322.0	793.6	33.7	759.9	8	3	42.4
1992年	458.5	352.4	810.8	32.5	778.3	8	3	45.3
1993年	423.9	382.2	806.1	39.1	767.0	8	3	49.8
1994年	442.3	420.1	862.4	37.9	824.5	9	3	51.0
1995年	423.6	511.5	935.2	40.3	894.8	9	3	57.2
1996年	412.7	572.6	985.3	47.5	937.7	10	3	61.1
1997年	471.6	595.0	1,066.6	48.8	1,017.9	10	4	58.5
1998年	411.6	614.4	1,026.0	44.6	981.0	10	4	62.6
1999年	431.6	592.4	1,024.0	41.7	982.3	10	4	60.3
2000年	430.0	610.5	1,040.4	39.7	1,000.7	10	4	61.0
2001年	418.1	565.5	983.6	39.7	943.9	9	3	59.9
2002年	427.1	541.7	968.7	36.3	932.4	9	3	58.1
2003年	423.0	610.9	1,033.9	33.8	1,000.1	9	3	61.1
2004年	412.4	705.9	1,118.3	27.2	1,091.1	10	4	64.7
2005年	414.0	708.9	1,122.9	25.2	1,097.7	10	4	64.6

注：1. 国内生産は卸売段階での花卉の売上げが年間10万ドルを超える生産者の売上げに基づく。

2. 輸出入はHS 0603（切り花および花芽）に基づく。

出所：United States Department of Agriculture（2007），p.14（Table A-2）。

16 Patel-Campillo（2008），p.3.

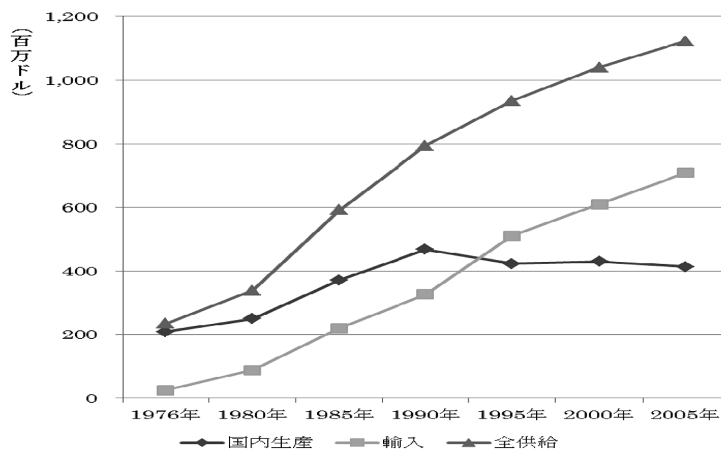
17 United States International Trade Commission（2003），p.21.

う。まず、第2表で1990年以降の市場構造を概観しておく、需給ともに増加傾向にあることが分かる。供給は1990年の7億9,400万ドルから2005年の11億2,290万ドルへ、消費は1990年の7億6,440万ドルから2005年の10億9,770万ドルへと、それぞれ約1.4倍増えている。

需給ともに注目すべき点は、輸入比率の増大である。2005年に需給に占める輸入比率はそれぞれ6割を超えている。ここで、第1図を併せて参照されたい。これは、花卉の供給を1970年代半ばまでさかのぼって示したものであり、供給に占める輸入比率の急増を読み取ることができる。米国は世界有数の花卉生産国であり、国内で栽培された花卉のほとんどは国内へ供給されている<sup>18</sup>。第1図によると、1976年には2億3,400万ドルの花卉が供給されており、そのうちの2億900万ドルは国内で生産されたものであった。すなわち、1970年代半ばには、供給の9割近くが国内生産でまかなわれており、輸入はごく僅かであった。

国内生産は1990年頃まで増え続けるが、輸入はそれを上回るペースで増大した。1990年には国内生産が4億6,800万ドル、輸入は3億2,600万ドルとなり、約15年のうちに全供給に占める輸入比率は4割へ上昇した。そして遂に、1995年に輸入が国内生産を抜き、2005年の供給に占める輸入比率は6割に達している。以上のことから、米国では花卉の供給は増大傾向にあるが、国内生産は徐々に減少しており、近年の供給の増大

第1図 米国における花卉供給の推移 (1976, 1980, 1985, 1990, 1995, 2000, 2005年)



注：1. 国内生産は卸売段階での花卉の売上げが年間10万ドルを超える生産者の売上げに基づく。

2. 輸入はHS 0603 (切り花および花芽)に基づく。

出所：United States Department of Agriculture (2007), p.12 (Table A-1), p.108 (Table F-1) より作成。

18 近年の花生産額は米国 (47億1,900万ユーロ) が最も多く、オランダ (37億8,000万ユーロ) がそれに続いている。ただし、ここでの花卉には切り花の他に鉢物などが含まれており、また、米国の生産額は販売額が1万ドルを超えるすべての生産者のものを含む。International Association of Horticultural Producers (2010), p.14.

19 United States International Trade Commission (2003), p.2.

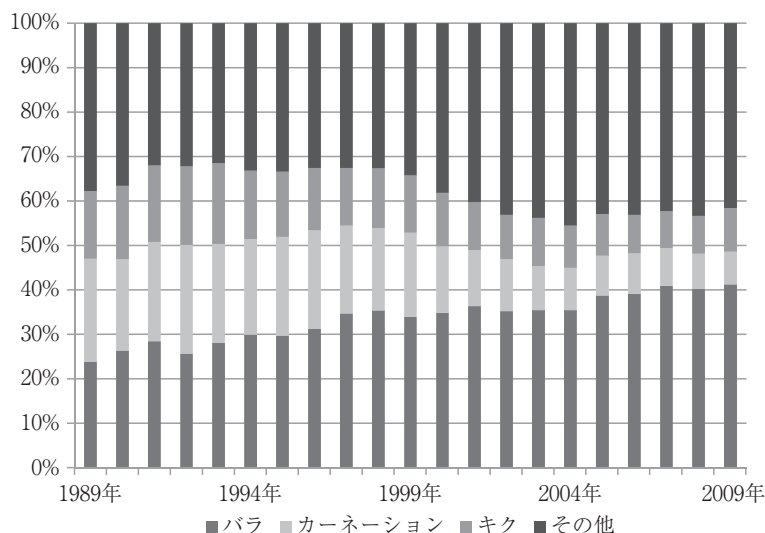
はもっぱら輸入が牽引しているといえよう。

花卉の輸入増大は、米国の市場構造に変化をもたらした。第2図は、米国が輸入している花卉の種類を示すものである。これによると、米国の輸入はバラ、カーネーション、キクに集中していることが分かる。とりわけ1990年代にこれらの集中度が高まっており、併せて7割近くを占めている。上記3種類の花卉は、後述するように、コロンビアやエクアドルから安く大量に輸入されている。それにともない、米国国内では低価格な輸入品と競合しないスペシャルティ・フラワーや鉢物などの生産にシフトする動きがみられるが、<sup>20</sup> 全体的に花卉生産者数は減少している。第3表に示すように、1997年には合計で829の生産者がいたが、2005年には500にまで減少している。

花卉の種類別にみても、とりわけバラ、カーネーション、キクの生産者数の減少が著しいことが分かる。生産者数はそれぞれ1997年には157, 78, 108であったが、2000年には108, 53, 86へ、2005年には60, 25, 48へと減少している。2000年から2005年にかけての減少率が全体では25%であるのに対して、これら3種の生産者ではそれぞれ5割前後に達する。それに比べて、ガーベラ、ラン、チューリップの生産者は増加しており、またデルフィニウム、アイリス、ユリ、リサンチウムの生産者の減少率は、全体よりも小幅なものにとどまっている。

花卉は多数の小規模・零細な家族経営によって主に生産が担われており、生産構造が

第2図 米国における花卉輸入の種類別推移（1989～2009年）



注：輸入額ベース。

出所：United States Department of Agriculture, Foreign Agricultural Service, GATS より作成。

20 United States International Trade Commission (2003), p.19. なお、スペシャルティ・フラワーとは一般的に、カーネーション、キク、グラジオラス、バラ以外の花卉を指す。

第3表 米国における花卉生産者数の推移 (1997~2005年)

	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2005年/ 2000年
バラ	157	130	114	108	94	83	69	64	60	55.6%
カーネーション	78	77	55	53	42	34	27	29	25	47.2%
キク	108	99	82	86	70	73	63	63	48	55.8%
グラジオラス	69	63	59	79	66	64	55	59	54	68.4%
アルストロメリア	NA	NA	NA	75	76	67	57	53	45	60.0%
デルフィニウム	NA	NA	NA	100	96	92	90	92	83	83.0%
ガーベラ	NA	NA	NA	56	53	55	54	60	62	110.7%
アイリス	NA	NA	NA	122	122	112	105	112	100	82.0%
ユリ	NA	NA	NA	157	153	156	140	146	144	91.7%
リサンチウム	NA	NA	NA	79	73	79	70	69	74	93.7%
ラン	NA	NA	NA	52	50	54	49	56	58	111.5%
スナップドラゴン	NA	NA	NA	169	164	155	153	146	123	72.8%
チューリップ	NA	NA	NA	88	92	88	91	100	98	111.4%
その他	656	639	568	464	416	419	377	376	340	73.3%
合計	829	690	656	667	625	618	541	542	500	75.0%

注：NA=Not Available.

出所：United States Department of Agriculture (2007), p.57 (Table C-4) より作成。

零細である<sup>21</sup>。米国においても花卉産業は家族経営のところが多く、一般的には高度な集中は進展していない<sup>22</sup>。しかしながら、以上みてきたように、米国では長期的な生産者の整理・統合が進展している。そして、存続している生産者は量的により多くの花卉を生産するようになってきている。大半の生産者の栽培面積は2万平方フィートに満たないが、いくつかの大規模な農場では花卉栽培に数百万フィートを割いているといわれている。

## 2 輸入国の変化

米国はどこからどのような花卉を輸入しているのだろうか。まず、輸入国については第3~4図を参照されたい。1970年代半ば以降、米国の花卉の輸入先はコロンビア、エクアドル、オランダの3カ国に集中していることが分かる。2009年にはコロンビアから5億700万ドル、エクアドルから1億1,800万ドル、そしてオランダから4,800万ドルの花卉を輸入しており<sup>23</sup>、これら3カ国で花卉輸入の8割以上を占めている。以下では、コロンビア、エクアドル、オランダの順にみていこう。

コロンビアが対米輸出を増やしたのは、1970年代初頭以降のことである。コロンビアでは1960年代中葉から末にかけてカーネーション栽培が開始され<sup>24</sup>、1970年代に対米

21 辻 (2001), 9ページ; 内藤 (2001), 1ページ。

22 United States International Trade Commission (2003), pp.8-11.

23 United States Department of Agriculture, Foreign Agricultural Service, GATS.

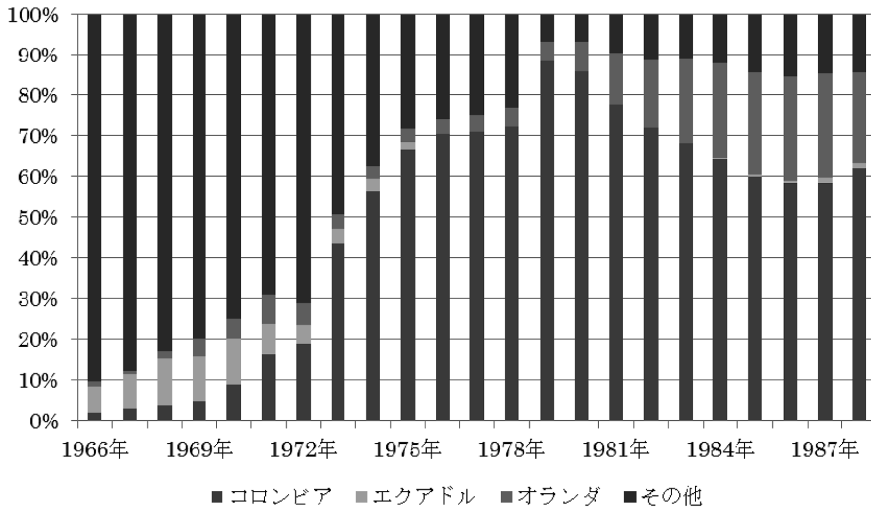


輸出を急増させた。そして、1970年代半ば以降、米国におけるコロンビアからの輸入比率は一貫して5割を超えている。なお、コロンビアは生産される花卉の8割を米国へ輸出しており、米国への依存度が非常に高い。<sup>25</sup>

エクアドルの対米輸出には2つの波がある。1つは、1960年代半ばから1970年代初頭にかけてである（第3図を参照のこと）。1968～70年には米国における花卉輸入の11%のシェアを占めていたが、その後はコロンビアやオランダに押されて、シェアを下げた。もう1つは、1990年代以降である（第4図を参照のこと）。エクアドルで花卉栽培が本格化したのは1985年頃といわれており、1997年以降はそのシェアを14～19%の間で推移させている。なお、エクアドルの花卉の対米輸出依存度は42%であり、コロンビアほどは高くない。<sup>27</sup>

オランダは世界最大の花卉輸出国であるが（第1表を参照のこと）、米国の花卉輸入に占める割合はそれほど高くない（2009年には6%；第4図を参照のこと）。オランダの比率が最も高かった時期は、対米輸出を急増させた1980年代のことである（第3図を参照のこと）。しかしながら、1980年代末にはギルダー切上げの影響によりオランダ

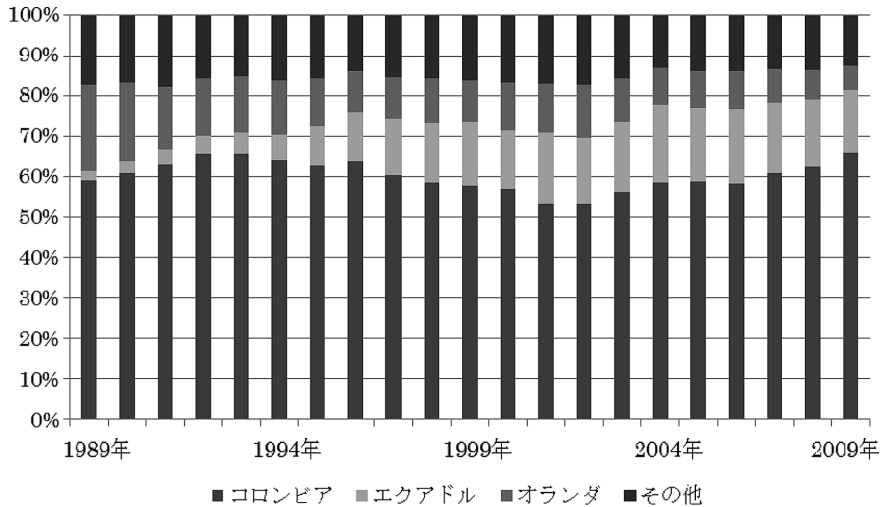
第3図 米国における花卉の主要輸入国の推移（1966～1988年）



注：1. 花卉には装飾用に適する切り花および切り葉を含む。  
 2. 各国のシェアは米国での輸入価額に基づくが、それは輸入先での市場価額を示す（米国での輸入税、運送料、保険料は含まない）。また、251ドル未満のものは集計対象外である。  
 出所：Johnson（1990）、pp.187-198（Table 116）より作成。

24 Ziegler (2007), p.41.  
 25 United Nations, Statistics Division, COMTRADE より算出。米国では多くの花卉（2001年には85%）が無税で輸入されるのに対して、EU（欧州連合）では8.5～12%の関税を賦課しているため、EUは中南米諸国にとって魅力のない市場となっている。United States, International Trade Commission (2003), p.26; Ziegler (2007), p.67.  
 26 Ziegler (2007), p.82.  
 27 United Nations, Statistics Division, COMTRADE より算出。

第4図 米国における花卉の主要輸入国の推移 (1989~2009年)



注：1. 輸入額ベース。

2. HS 0603 (切り花および花芽) に基づく。

出所：United States Department of Agriculture, Foreign Agricultural Service, GATS より作成。

の対米輸出は激減し<sup>28</sup>、そのシェアを減少させた。1990年代にはエクアドルが対米輸出を増やすようになり、オランダは1996年にエクアドルにシェアで逆転された。そして、2002年のユーロ高の影響で、オランダの花卉は再び高価なものとなった。なお、オランダの花卉の対米輸出依存度は2%であり<sup>30</sup>、主な輸出先はドイツや英国、フランスなどの欧州諸国である。

### 3 輸入される花卉の種類の変化

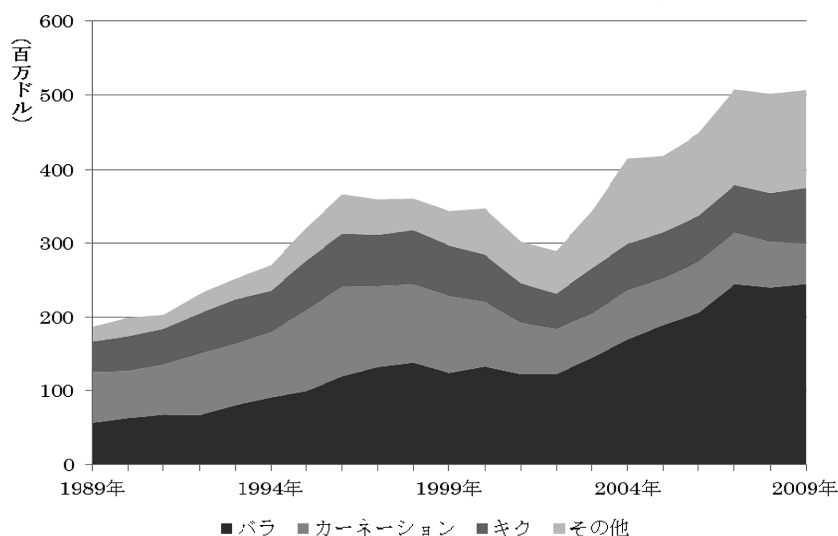
米国はコロンビア、エクアドル、オランダの3カ国から多くの花卉を輸入しているが、それはどのような種類なのだろうか。第5~7図は上記3カ国からの種類別輸入額の推移を示すものである。まず、コロンビアについては、以下の3点を指摘することができる(第5図を参照のこと)。第1に、バラ、カーネーション、キクといったメジャーな花に集中している。これら3品種は、1980年代末から2000年代初頭にかけて、コロンビアからの輸入の8割超を占めている。2009年の内訳は、バラが48%、カーネーションが11%、そしてキクが15%である。第2に、コロンビアから近年最も多く輸入されているのはバラである。1980年代末にはカーネーションが最多であったが、カーネーションは1990年代後半以降、減少傾向に転じた。代わってバラの輸入が増えており、とりわけ2000年代初頭以降の急増ぶりが目立つ。第3に、2000年初頭以降はその

28 Ziegler (2007), p.80.

29 Ziegler (2007), p.80.

30 United Nations, Statistics Division, COMTRADE より算出。

第5図 米国がコロンビアから輸入している花卉の種類別推移（1989～2009年）



- 注：1. バラは生鮮のもので、2006年まではHS 06031060、それ以降はHS 060311。  
 2. カーネーションは生鮮のもので、2006年まではHS 06031030（ミニカーネーション）とHS 0603107030（スタンダードカーネーション）を併せたもの、それ以降はHS 060312。  
 3. キクは生鮮のもので、2006年まではHS 0603107010（ボンボンキク）とHS 0603107020（ボンボンキク以外のキク）を併せたもの、それ以降はHS 060314。  
 出所：United States Department of Agriculture, Foreign Agricultural Service, GATS より作成。

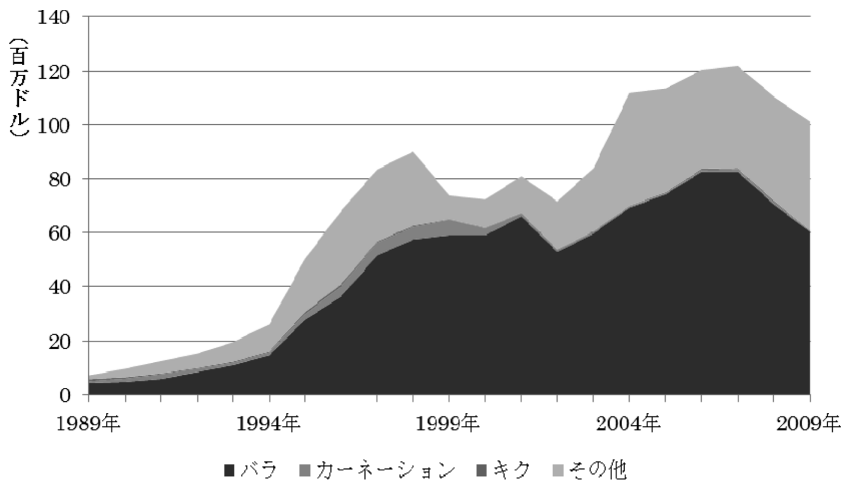
他の花卉の輸入が増えている。<sup>31</sup>

次いで、エクアドルからの輸入の特徴は、第1にバラに集中していることである（第6図を参照のこと）。バラの輸入は1990年代半ば以降に急増したが、2000年代初頭になると減少傾向に転じた。その後はやや持ち直したものの、近年では再び減少傾向にある。しかし、それでも2009年のバラの輸入比率は5割を占める。第2に、1990年代半ば以降、その他の輸入が急激に増大したことである。2000年代初頭に減少したが、近年には再び増加に転じている。さらに、オランダから輸入される花の特徴は、バラ、カーネーション、キクが少なく、その他が圧倒的に多いことである（第7図を参照のこと）。

以上のことから、米国の輸入先はコロンビア、エクアドル、オランダに集中しており、これら3カ国から輸入される花卉には2つのパターンがあることが分かった。すなわち、コロンビアとエクアドルからはバラ、カーネーション、キクといったメジャーな花が、オランダからはその他のスペシャルティ・フラワーが輸入されている。<sup>32</sup>

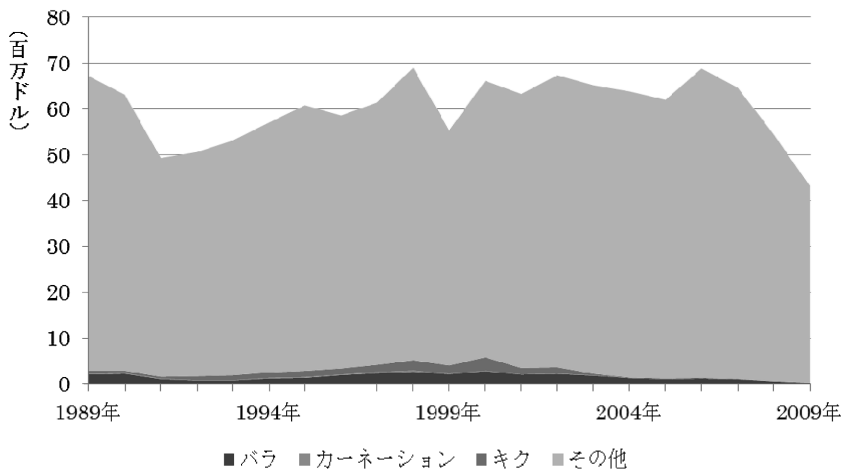
31 コロンビアでは、500の農家が花卉輸出の75%を供給している。そして、残りの25%はドール社(Dole Fresh Flowers)が運営する4つの農場で生産されたスペシャルティ・フラワーであるといわれている。Ziegler (2007), p.72.  
 32 花卉の平均的な輸入価格は22セントだが、スペシャルティ・フラワーは84セントである(2000年)。Ziegler (2007), p.62.

第6図 米国がエクアドルから輸入している花卉の種類別推移 (1989～2009年)



注：1. バラは生鮮のもので、2006年までは HS 06031060、それ以降は HS 060311。  
 2. カーネーションは生鮮のもので、2006年までは HS 06031030 (ミニカーネーション) と HS 0603107030 (スタンダードカーネーション) を併せたもの、それ以降は HS 060312。  
 3. キクは生鮮のもので、2006年までは HS 0603107010 (ボンボンギク) と HS 0603107020 (ボンボン以外のキク) を併せたもの、それ以降は HS 060314。  
 出所：United States Department of Agriculture, Foreign Agricultural Service, GATS より作成。

第7図 米国がオランダから輸入している花卉の種類別推移 (1989～2009年)



注：1. バラは生鮮のもので、2006年までは HS 06031060、それ以降は HS 060311。  
 2. カーネーションは生鮮のもので、2006年までは HS 06031030 (ミニカーネーション) と HS 0603107030 (スタンダードカーネーション) を併せたもの、それ以降は HS 060312。  
 3. キクは生鮮のもので、2006年までは HS 0603107010 (ボンボンギク) と HS 0603107020 (ボンボン以外のキク) を併せたもの、それ以降は HS 060314。  
 出所：United States Department of Agriculture, Foreign Agricultural Service, GATS より作成。

### Ⅲ 米国における花卉流通の変容

#### 1 生鮮花卉のグローバルな商品連鎖

1970年代以降、花卉の生産と貿易はグローバル化が進展した。元来、市場の近くで生産されていた花卉は、発展途上国においてもつばら輸出用に栽培されるようになって<sup>33</sup>いる。そして、世界有数の花卉生産国である米国は、1970年代以降に花卉を輸入するようになり、今日では需給に占める輸入比率が6割近くに及んでいる。

ジーグラールは花卉のグローバル・システムをGCC（グローバルな商品連鎖）のアプローチを用いて分析しており、今日の花卉のグローバル・システムを「グローバルに分散した生産者を米国の消費者に結びつける拡張したシステム」と位置づけている<sup>34</sup>。そして、それを調整しているのが中間業者（middleman）であるというのが、まずGCCのアプローチについて簡単に触れておこう。

GCCのアプローチは、商品連鎖を土台とするものである<sup>35</sup>。そもそも商品連鎖とは、ウォーラーステイン（I. Wallerstein）らの「世界システム論」で提唱された概念であり、彼らによれば「労働と生産の過程からなるネットワークで、それらの最終的な成果は完成した商品」として定義されている<sup>36</sup>。これを踏まえて1990年代に登場したのがゲレツフィ（G. Gereffi）らによるGCCであり、彼らは商品連鎖を「ある商品や製品、それにかかわる世帯や企業、あるいは国家が世界経済システムの中で相互に関わり合う組織間のネットワークによって構成されるもの」としてとらえた<sup>37</sup>。

GCCに関する先行研究を整理した荒木（2007）によれば、商品連鎖は、原材料や半製品などの調達に関わるもの、労働力およびその供給に関わるもの、輸送に関わるもの、市場など流通、分配に関わるもの、および最終消費に関わるものによって構成されることになる。その際に、鍵とされたのが「商品」であり、世界経済における周辺での生産と中核での小売・消費を連結する商品の連鎖に注目するのがGCCのアプローチである。

GCCアプローチの1つの特徴は、統治構造（governance）に焦点をあてることにある。すなわち、商品連鎖がいかにして組み立てられ、コントロールされているのかに注目する。GCCの大きな基礎を構築したゲレツフィは、アパレル産業の国際的な展開を

33 輸出用に花卉を生産している国は65カ国にのぼる。Ziegler（2007），p.58.

34 Ziegler（2007），p.15.

35 以下、商品連鎖に関する記述は、荒木（2007）；野尻（1997），232-234ページ；高柳（2006），21-23ページを参照した。

36 Hopkins and Wallerstein（1986），p.159.

37 Gereffi, Korzeniewicz, and Korzeniewicz（1994），p.2.

検討するなかで、2つの対となる概念を提示した<sup>38</sup>。すなわち、作り手主導 (producer-driven) 型と買い手主導 (buyer-driven) 型である。航空機や自動車、コンピューターなど高度な生産体系や技術、高賃金の熟練労働者を必要とするのが前者の商品連鎖で、衣類や玩具、家電品など高度な知識や技能を必要とせず、非熟練労働者でも生産が可能で、外部化が容易なものが後者の範疇に入る。

農産物の多くは後者の買い手主導の商品連鎖に位置づけられ、農業の変化や出入荷圏の再編成は買い手によって首肯されていると考えられてきた<sup>39</sup>。このときの買い手としては、商社やスーパーマーケットなどの流通・小売企業が取り上げられている。特に、チェーンスーパーに代表される先進国の小売業が、商品の仕入れ (調達) ネットワークの構築を通じて、途上国を含めたグローバルな規模での地域再編成に大きな影響を与えたことが注目されている。これらの先進国の買い手が発展途上国と先進国間の関係を再編成し、発展途上国の農業にインパクトを与える主体となるのである。

ジグラーもチェーン内でのパワーと統治の本質を明らかにすべく、①1870～1920年、②1920～1970年、③1970～2005年に時代を区切って分析を進めている<sup>40</sup>。1870～1920年の時期には、米国 (特にニューヨーク近郊) で花卉を購入することは階級ある人たちの特権であると考えられていた。そして、上流階級に属する人々 (消費者) がチェーン内でパワーを持っており、彼らが栽培される花の種類や時期を決めていた。

1920～1970年は、花卉の大量生産と低価格化が進展し、生産者がチェーンを統治するようになった時期である。価格の低下にともない、上流階級の間で花卉の購買は人気がなくなくなり、代わって中流階級に属する人々が主たる購買者となった。そして、花卉の生産と貿易がグローバル化した1970年以降は、中間業者がチェーンの統治者として台頭している。以上のように、花卉のGCCの統治者は消費者から生産者へ、そして中間業者へと移行してきたと考えられる。

1960年代に米国の消費者が購入することのできた花卉はキク、グラジオラス、バラ、スタンダードカーネーションくらいしかなかった<sup>41</sup>。しかしながら、輸送技術の発達によって花卉の生産と貿易がグローバル化した今日では、米国で購入することのできる花卉は200種類を超える<sup>42</sup>。花卉は多品目・多品種の流通を特徴としている<sup>43</sup>。そして、生産・消費される花卉の量と種類が劇的に拡大するにつれ、生産と消費をつなぐ流通が重要な役割を果たすのである。

38 Gereffi (1994).

39 荒木 (2007), 44 ページ。

40 Ziegler (2007), pp.5, 15, 23, 25. ジグラーは、1870年以降のニューヨーク近郊で小規模な商業的花卉産業が展開するようになったことを踏まえ、1870年から分析を始めている。

41 United States International Trade Commission (2003), p.17.

42 United States International Trade Commission (2003), p.4.

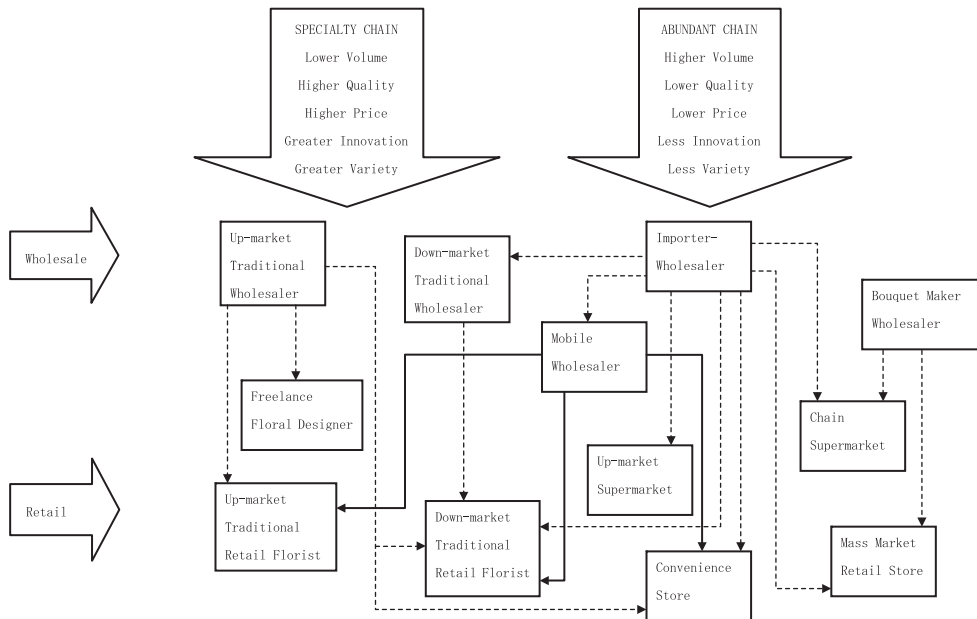
43 辻 (2001), 9 ページ; 内藤 (2001), 1 ページ。

2 スペシャルティ・チェーン（SC）とアバンダント・チェーン（AC）

ジエグラーによれば、花卉のグローバル・システムは一様ではなく、花卉の種類によって「スペシャルティ・チェーン（specialty chain；以下では SC）」と「アバンダント・チェーン（abundant chain；以下では AC）」の2つに分けることができる。本稿で検討した結果、米国の花卉の輸入先はコロンビア、エクアドル、オランダに集中しており、これら3カ国から輸入される花卉には2つのパターンがあることが分かった。すなわち、コロンビアとエクアドルからはバラ、カーネーション、キクといったメジャーな花が、オランダからはその他のスペシャルティ・フラワーが輸入されている。ジエグラーの2つのチェーンは、これらの事実に対応するものである。

第8図はジエグラーが提示した SC と AC を示すものである。<sup>44</sup> SC では少量生産される高品質・高価格な花が取引されている。生産者は技術革新への取組みが熱心であり、花卉の種類が豊富である。SC には主に2つの流通経路がある。1つは伝統的な卸売業者（traditional wholesaler）から伝統的な生花商（traditional retail florist）へ向かうものであり、もう1つは伝統的な卸売業者からフローラル・デザイナー（floral designer）へ向かうものである。伝統的な生花商やフローラル・デザイナーは新しい花に関する情報にとっても敏感であり、伝統的な卸売業者と長期的・個人的関係を構築し、情報の交換・管理に注力している。

第8図 中間業者とスペシャルティ・チェーン、アバンダント・チェーン



出所：Ziegler (2007), p.134 (Figure 24).

44 以下、SC および AC については、特に断らない限り、Ziegler (2007), Chapter 6 を参照した。

他方、ACでは大量生産される低品質・低価格の花が取引されている。主な流通経路は、①輸入業者兼卸売業者 (importer-wholesaler; 輸入業者兼仲立人 (importer-broker) と呼ばれることもある) からスーパーマーケット (supermarket) に向かうもの、②輸入業者兼卸売業者からコンビニエンス・ストア (convenience store) に向かうものである。輸入業者兼卸売業者は1970年代に、コロンビアからの花卉流通を取り扱うためにマイアミで誕生した業態で、1980年代から90年代にかけて成長した。2005年現在、マイアミに75~100業者が存在するといわれている。

スーパーマーケットやコンビニエンス・ストアは、個人的関係や花卉に関する情報の交換をあまり重視しない。そうした人的・共同的な結びつきよりもむしろ、純粋に経済的な取引に基づく傾向がある。これらの仕入れ担当者はバラやカーネーション、キクといったメジャーな花しか知らないため、既成の単一の花束か、複数の花から成る花束を注文しがちである<sup>45</sup>。そして、供給者は商品の全責任を負い、マージンを下げることを要求される。

花卉は主に零細多数の専門小売店を通じて最終消費者に販売されており、小売構造が零細である<sup>46</sup>。1970年以前の米国では、伝統的な生花商が花卉販売の9割を占めていた。しかしながら、今日ではその比率は3割未満へ低下している<sup>47</sup>。代わって、スーパーマーケットやスーパーストア (ウォルマートやサムズ・クラブ) での販売が増えており、それぞれ50%と8%のシェアを占めている<sup>48</sup>。

なお、ジグラーのACにおいては、輸入業者兼卸売業者に加えて、2つの新しい中間業者が出現している。それは、花束加工卸売業者 (bouquet maker wholesaler) とモバイル卸売業者 (mobile wholesaler) である。前者はスーパーマーケットでの花卉販売の増大とともに出現したもので、米国国内の生産地や輸入地 (主にマイアミ) に立地している<sup>49</sup>。近年、花束の加工が商品連鎖の先端に押しやられる傾向があり、花束加工卸売業者はコロンビアやエクアドルへシフトしつつある。後者は、1980年代初頭のニューヨークに出現した業態で、オランダの花卉輸入業者をその源流とするといわれている。彼らは現金による大量仕入れを行っており、買い手は値引き交渉が可能である。

45 コストコはベンダーに対して、3つのSKU (ミックスブーケ、生産者ごとの花束、バラ) の使用を要求している。

46 内藤 (2001), 1 ページ。

47 Ziegler (2007), pp.51-52, 122.

48 Ziegler (2007), p.122.

49 米国へ輸入される花卉の70%超はマイアミを経由する。Ziegler (2007), p.264.



## むすびにかえて

本稿での検討結果は、以下の3点である。第1に、1970年代以降、花卉の国際貿易は著しい変化を遂げた。量的には、1970年代に輸出入とも8倍前後増大した。また、質的には、花卉の国際貿易に従事する国が増大した。1960年代初頭には欧州5カ国で輸出入の9割超が行われていたが、1970年以降は輸入国として米国が、輸出国としてコロンビアなどの発展途上国が台頭するようになった。そして、2009年の上位5カ国のシェアは、輸入額で6割、輸出額で8割をそれぞれ超える。従来、花卉の輸出入は先進国間で行われてきたが、1970年代以降は発展途上国からの輸出が比較的大きなシェアを占めるようになった。

第2に、米国では花卉の国内生産が遞減傾向にあり、代わって輸入が増えている。米国は世界有数の花卉生産国であり、国内で消費される花卉は国内で生産してきた。しかしながら、1970年代以降、輸入を増やすようになった。輸入国はコロンビア、エクアドル、オランダの3カ国に集中しており、コロンビアとエクアドルからはメジャーな花（バラ、カーネーション、キク）を、オランダからはスペシャルティ・フラワーを輸入している。輸入の増大にともない、米国国内の生産者数は全体的に減少している。とりわけバラ、カーネーション、キクの生産者の減少率が著しい。

第3に、生産・消費される花卉の量と種類が拡大するのにもない、中間業者が重要な役割を果たすようになってきている。ジューグラーは花卉のグローバル・システムを論じるにあたり、花卉の種類に応じて、2つのチェーンに分割した。1つはSCであり、少量生産される高品質・高価格な花が取引されるチェーンである。主として、伝統的な卸売業者から伝統的な生花商に向かう流通経路をとる。もう1つはACで、大量生産される低品質・低価格な花卉を対象としている。主な流通経路は、輸入業者兼卸売業者からスーパーマーケットやコンビニエンス・ストアに向かうものである。従来、花卉の売上げのほとんどを占めていた生花商のシェアは下落し、代わって量販店（スーパーマーケット等）での売上げが増えている。

花卉は古くから商品として存在していたが、貯蔵性に乏しいのと商品特性から、その生産地は市場の近くに限定されていた。しかしながら、輸送技術の発展により市場との距離が克服されるにつれ、花卉の生産地はより最適な場所を求めて広域化していった。そうして1970年代以降は発展途上国が主産地化し、花卉を低価格で安定的に、先進国へ供給するようになってきている。供給に際しては、航空輸送を利用することが多い。なぜなら、花卉は嗜好品的な商品特性を有することから、運賃負担力が高いからである。すなわち、安価に生産された花卉は、高い航空運賃を支払って、先進国へ輸出されてい

る。

今後の課題は、花卉輸入国として台頭した米国への花卉の流れを詳細に分析することである。すなわち、オランダからの花卉の流れと、コロンビアとエクアドルからの花卉の流れについてである。オランダの生産者からのチェーンではオークションを経由する<sup>50</sup>。ここには中立的な検閲官がおり、不備のある花でもオークションにかけられる（買い手に正確な情報を伝えるのが検閲官の役割である）。そのため、価格が公になり、生産者と買い手との正式契約が締結されるという特徴がある。これに対して、コロンビアとエクアドルの生産者からのチェーンではマイアミ卸売市場を経由しており、ここでは7割が委託ベースで販売されている<sup>51</sup>。委託システム（consignment system）では正式な契約はなく、口頭での合意・紳士協定が一般的であるため、取引は電話やメールで行われ、価格や量の情報は秘密である。以上のような特徴を有するそれぞれのシステムの違いに注目し、輸送技術の発展にともなう花卉流通の変容に関する研究を深めていきたい。

#### 参考文献

- 荒木一視 (2007) 「商品連鎖と地理学－理論的検討－」『人文地理』第59巻第2号, 41-61 ページ。
- 石川実令 (2003) 「1970年代のアメリカにおけるエア・エクスプレスの発展－フェデックス社の翌日配達サービスを中心に－」『商学論纂』第44巻第5号。
- (2004) 「フェデックス社の国際ネットワーク戦略－ハブ・アンド・スポーク・システムの国際展開を中心に－」『商学論纂』第45巻第5・6号。
- (2005) 「エア・エクスプレス・ロジスティクスに関する一考察－インテグレーターによる3PLの展開を中心に－」『商学論纂』第46巻第6号。
- (2006) 「世界の巨大ロジスティクス企業」加藤義忠監修, 日本流通学会編集『現代流通事典』白桃書房, 188-189 ページ。
- (2007 a) 「グローバル・ロジスティクス・システムの生成－インテグレーターによるサービス高度化のプロセスの解明－」博士論文 (中央大学)。
- (2007 b) 「インテグレーターとグローバル・ロジスティクス・システム－戦略展開と寡占体制－」『運輸と経済』第67巻第12号。
- (2007 c) 「情報通信技術とロジスティクス・サービスの高度化－フェデックス社によるEDI (電子データ交換) の活用を中心に－」『商学論纂』第48巻第5・6号。
- 太田弘 (1976) 『花卉の生産と流通』明文書房。
- 木立真直 (1985) 『農産物市場と商業資本－緑茶流通の経済分析－』九州大学出版会。
- 黒崎利夫 (1999) 「非伝統農産物輸出と持続的発展－中米農業の復活と国際資本の支配－」小池洋一・堀坂浩太郎編『ラテンアメリカ新生産システム論－ポスト輸入代替工業化の挑戦－(研究双書499)』日本貿易振興会アジア経済研究所, 第4章。
- 小林康平・甲斐論・諸岡慶昇・福井清一・浅見淳之・菅沼圭輔 (1998) 『変貌する農産物流通システム－卸売市場の国際比較－(全集 世界の食料 世界の農村②)』農山漁村文化協会。
- 高柳長直 (2006) 『フードシステムの空間構造論－グローバル化の中の農産物産地振興』筑波書房。

50 Ziegler (2007), pp.74-81.

51 Ziegler (2007), pp.114-116. 米国の委託システムは19世紀末にニューヨークで確立した。

- 辻和良 (2001) 『切り花流通再編と産地の展開』 筑波書房。
- 辻和良 (2009) 「花き生産を取り巻く環境変化と産地の課題」 橋本卓爾・大西敏夫・藤田武弘・内藤重之 編著 『食と農の経済学 [第2版] - 現代の食料・農業・農村を考える - (MINERVA TEXT LIBRARY ⑦)』 ミネルヴァ書房, 第12章。
- 内藤重之 (2001) 『流通再編と花き卸売市場』 農林統計協会。
- 野尻亘 (1997) 『日本の物流 - 産業構造転換と物流空間 -』 古今書院。
- 矢作敏行 (2001) 『現代流通: 理論とケースで学ぶ』 有斐閣。
- Bair, Jennifer (ed.) (2009), *Frontiers of Commodity Chain Research*, Stanford University Press.
- Gereffi, Gary (1994), "The Organization of Buyer-Driven Global Commodity Chains: How U.S. Retailers Shape Overseas Production Networks," in Gary Gereffi and Miguel Korzeniewicz (eds.), *Commodity Chains and Global Capitalism*, Praeger, Chapter 5.
- Gereffi, Gary, Miguel Korzeniewicz, and Roberto P. Korzeniewicz (1994), "Introduction: Global Commodity Chains," in Gary Gereffi and Miguel Korzeniewicz (eds.), *Commodity Chains and Global Capitalism*, Praeger, Chapter 1.
- Hopkins, Terance K. and Immanuel Wallerstein (1986), "Commodity chains in the world-economy prior to 1800," *Review* 10(1), pp.157-170.
- International Association of Horticultural Producers (2010), *International Statistics Flowers and Plants 2010*.
- International Trade Centre UNCTAD/WTO (1997), *Cut Flowers: A Study of Major Markets* (Product and Market Development).
- Johnson, Doyle C. (1990), *Floriculture and Environmental Horticulture Products: A Production and Marketing Statistical Review, 1960-88* (Statistical Bulletin No.817), United States Department of Agriculture, Economic Research Service.
- Patel-Campillo, Anouk (2008), "Crossing Boundaries: Putting A Global Commodity in Its Place," A Dissertation Presented to the Faculty of the Graduate School of Cornell University in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree of Doctor of Philosophy.
- Stewart, Amy (2008), *Flower Confidential: The Good, the Bad, and the Beautiful*, Algonquin Books of Chapel Hill.
- United States Department of Agriculture (2007), *Floriculture and Nursery Crops Yearbook, FLO-2007*.
- United States International Trade Commission (2003), *Industry & Trade Summary: Cut Flowers* (USITC Publication 3580).
- Ziegler, Catherine (2007), *Favored Flowers: Culture and Economy in a Global System*, Duke University Press.
- データベース
- United Nations, Statistics Division, COMTRADE (Commodity Trade Statistics Database).
- United States Department of Agriculture, Foreign Agricultural Service, GATS (Global Agricultural Trade System).